

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 31 日現在

機関番号：24402

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520151

研究課題名（和文） 芸術によるコミュニティ創出

研究課題名（英文） Generation of community through arts

研究代表者

中川 眞（NAKAGAWA SHIN）

大阪市立大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：40135637

研究成果の概要（和文）：本研究ではアーツマネジメントを貧困や困難に苦しむ社会的弱者の現場において活用し、社会包摂の一環に組み入れることによって、文化による社会の再構築を行うという、アーツマネジメントの新しい意味と作用を見出し、その実践的研究に取り組もうとするものである。東日本大震災の津波被害後のコミュニティ再生の過程と芸術、とりわけ現代アート、民俗芸能とコミュニティの関わりについて重点的に調査を行い、本研究課題の重要性を再確認した。

研究成果の概要（英文）：This study attempted to discover a new meaning and effect of art management to restructure a society through culture using art management in the position of socially disadvantaged people who suffered from poverty and difficulties and incorporating it as part of the society and to work on practical studies of such new meaning and effect. Aftermath the tsunami disaster of the Great Tohoku Earthquake, the function of contemporary arts and traditional performing arts for regeneration of communities were mainly investigated, and the importance of this research topic was recognized.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2010年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：芸術・コミュニティ創出・アジア型アーツマネジメント・社会的包摂・東日本大震災・マイノリティ・ネットワーク・民俗芸能

1. 研究開始当初の背景

グローバル化が進むなかで、新自由主義的な構造改革によって福祉政策が後退し、障害者や野宿者、高齢者など「社会的弱者」の生活困窮が増大するという社会格差が広がっ

ている。我が国では、ホームレス、ニートなどという形で顕在化している。このコミュニティの危機とでもいうべき事態の克服は喫緊の政策的課題であるが、本研究では、芸術の創造的な作用を通してコミュニティを再

生し、社会的に排除されている人々の自立を支援し、社会包摂を実現する社会のあり方を多角的に検討しようとした。社会的弱者に光をあて、そこに芸術という媒介項を投入してコミュニティを駆動するというのは突飛な手法に見えるが、現代の社会的問題を突破するための有力な戦略であることが徐々に認知されてきている。

本研究についての先行研究は非常に少ない。アートマネジメント研究では、Nina Freedlander Gibans の “The Community Arts Council Movement” (1982) などを先駆けとするが、早くても 1980 年代が学術的考察の起点である。日本では 90 年代後半にようやく、小林進『コミュニティ・アートマネジメント』(1998)、伊藤裕夫他(編)『アーツマネジメント入門』(2001)、林容子『アートマネジメント』(2004) らが見られ始めたが、本研究で対象とするような、障害者などの社会的弱者と芸術の関係を論じる議論は、コミュニティアートのマネジメント研究のなかでは極めて乏しい。

本研究は、グローバル化の弊害を直視しようとする社会的包摂論との関係も視野に入れている。中根光敏(編)『社会的排除のソシオロジー』(2002)、バラ+ラペール共著『グローバル化と社会的排除 - 貧困と社会問題への新しいアプローチ』(2005)、アマルティア・セン『不平等の再検討』(2005)、福原宏幸「日本における自立支援と社会的包摂」『経済学雑誌 106 (2)』所収(2006)などがこの分野の標準的学術書として挙げられるが、芸術文化との連繋という視点はいずれも希薄である。

2. 研究の目的

本研究は、弱体化した地域コミュニティの賦活や再生に、芸術、特に現代芸術がどれほ

ど資することができるのか、ということ考察するのが目的である。そこでは、従来のコミュニティ再生論にはない新たな視点、他方では、社会と遊離しがちであるといわれる現代芸術の新たな存在意味、この2点が同時に問われ、明らかとなる。具体的には、近年、活動が顕著となってきた社会包摂系 (social inclusive) の芸術活動に焦点をあてて調査、研究を行う。野宿者、重篤な入院患者と家族、高齢者と介護者、新移民などのエスニック・マイノリティ、(地震などの) 激甚な被災者、障害者などといった社会的弱者に現代芸術家がかかわり、人々を排除から包摂へと導きながら、コミュニティもまたそれに応じて変化し、新たなコミュニティへと生まれ変わってゆく過程を研究するものである。

「コミュニティ創出」「アーツマネジメント」「公共性」「社会的包摂」「マイノリティ」などが主なキーワードである。

3. 研究の方法

本研究は実践研究であり、担当者4名がそれぞれ地域社会での「現場」をもっているところに大きな特徴、利点がある。実践と理論の往還をスムーズに行い、学としての基盤を速やかに立ち上げることを本研究の特性として考え、知識や経験を共有できる速度と、実践における協働の可能性の高さを求めて、現場が相互に近い4名でもって本研究チームとした。それぞれの役掌は以下の通りである。

(1) 中川真【統括(代表者)、海外ネットワーク】: 大阪市立大学内の都市研究プラザをベースに、バンコク(タイ)、ジョクジャカルタ(インドネシア)など東南アジアを視野に入れた活動。アート&アクセス研究会、災害下の文化復興支援組織を主宰し、社会実践を行う傍ら、シンポジウム等の公的発

信を頻繁に行う。またアートミーツケア学会の副会長としてアートとケアの交差領域に取り組む。

(2) 山口悦子【実践統括】：大阪市立大学大学院医学研究科の講師として治療に取り組むほか、療養環境の改善のために、1999年より附属病院にて芸術家によるワークショップを開催。院内チームとともに外部の芸術系NPOが協働し、添え物程度であった芸術活動を大胆に導入することにより、患者、家族、医師、看護師の病院環境を激変させる実践研究を行う。

(3) 増田聡【研究会、発信】：大阪市立大学が市内の発信拠点として開設した船場アートカフェのディレクターとして、コミュニティに芸術活動を投入する活性化プロジェクトを精力的に実施。特に、コミュニティ・コラボラティブ・アート（コミュニティと協働するアート）プロジェクト、タウンマネジメントとしての船場建築祭は、本研究における、アートによるコミュニティの賦活と深い関係にある。ビジネス的な観点から、弱者の就労支援の一助にする発想、取り組みが必要で、その際には増田の芸術産業論、知財研究が重要な役割を果たしている。

(4) 諏訪晃一【ステークホルダー・ネットワーク】：大阪大学大学院人間科学研究科で教鞭と取る傍ら、(特非)市民活動センター神戸の理事として、ボランティア活動をはじめとする市民活動をコミュニティに定着させるための方策を検討、実践。芸術家のもつコミュニケーションの技術、デザイン力をNPO活動に活かすプロジェクト「都市におけるアート・デザインを媒介としたNPOと市民の間のコミュニケーション回路の開発」実践のさらなる展開をもくろむ。

研究計画としては、①月例で行われる研究会、②各現場（国内・海外）における実践、

③本研究のテーマに関連する現場に赴くフィールドワーク（海外を含む）、④シンポジウム等の開催、⑤政策への提言、⑥研究成果の出版、を活動の軸に据えた。

4. 研究成果

本研究は実践研究であり、社会的包摂の現場に赴き、そこでの芸術の役割、意義等を考察して芸術の新たな活動の場を提言、確保することを目的としている。平成21～22年度は当初の計画通り進行し、平成23年度には研究の集大成を編む予定であったが、平成23年3月11日に東日本大震災が起こったため、予定を若干変更して、津波被害後のコミュニティ再生あるいは再創出の過程と芸術、とりわけ現代アート、民俗芸能とコミュニティの関わりについて重点的に調査を行い、本研究課題の重要性を再確認するとともに、更なる課題の発見に務めた。

研究成果としては、野宿者、重篤な入院患者と家族、高齢者と介護者、新移民などのエスニック・マイノリティ、(地震などの)激甚な被災者、障害者などといった社会的弱者が生活する被排除傾向の場において、包摂・融合への強烈なベクトルを生み出すアートの力を明らかにすることができた。またその過程で、アーティストが新たな場と出会うことによって、これまでにない芸術表現を生み出すことができるのも確認できた。そういう点において、芸術にとっても社会的包摂の現場にとっても有意義な研究成果を挙げることができた。また、自然災害を含め、様々な社会問題を抱えるアジア諸国にも本研究は適用可能であり、そこから実効性の高いアジア型のアーツマネジメント論が生まれ可能性を示唆できた。研究代表者は、そういった観点から、アジア諸国とりわけ東南アジアの研究機関とのネットワーク構築にも注力し、

本成果がアジア諸国で共有され、次の研究ステップへと繋がっていく段階へ移行していることが確認された。以下、各成果を項目に分けて記述する。

(1) 実践研究の諸相 (アートによるコミュニティ創出の社会実験)

①船場アートカフェ (研究代表者がプロデューサー) : 歴史的都心である船場の空間資源と文化資源の共化を目的とした「まちのコモンズ (船場博覧会)」を毎年開催した。年を経るごとに地元コミュニティのメンバーの参加 (企画・運営) が増加していった。イベント開催という目標を具体的に設定することで、地域資源活用手法の具体的な開発を促し、都心コミュニティの再構築へとつながるエリアマネジメントのプラットフォームとなることが確認された。この社会実験の実践を通して、行政の都市空間政策や、中之島・船場におけるまちづくりにおいて、都市再生研究のシンクタンクとしての大阪市立大学のプレゼンスを確固たるものとするに至った。最終年度に論文集として船場アートカフェ編『船場アートカフェ2』(URP GCOE DOCUMENT 13, 大阪市立大学都市研究プラザ・水曜社, 2012) を刊行した。

②市大病院プロジェクト : ハナムラチカヒロの『霧はれて光きたる春』というインスタレーションを 2010 年 3 月に 5 日間にわたって大阪市立大学医学部附属病院で実施した。18 階建ての中央病棟の吹き抜け部分に照明とシャボン玉、音楽による 30 分の作品提示がなされ、患者、その家族、医師、看護師、医療事務員、見舞客などが窓ガラス越しに鑑賞した。アート活動がもたらす病院側のメリットは、〈病院共同体〉の構成員が協働的な芸術活動への参加を通して、組織横断的で柔軟な人間関係を獲得する可能性がある点にある。一般に病院はセクショナリズムが強く、

部署間のコンフリクトが日常的に発生するが、そこにアートという協同で取り組む活動を持ってくることによって、相互のコミュニケーションが活性化し、病院=コミュニティの組織内の風通しがよくなることが観察された。

③創造音楽祭 : 2006 年のジャワ島中部大震災からのポスト文化復興のプログラムとして、ジョグジャカルタで 2009 年から始めた。被災地の小学校にて教科書等に縛られない自由な発想による音楽=創造音楽をつくり、それを発表するイベントである。このプログラムの目的は新しい音楽表現ができるようになることではなく、将来、子どもたちが何か困難にぶつかったときに、このワークショップで得た「創造的に解決する術」で乗り越えてほしいという点に主眼がおかれている。

(2) シンポジウム、学術会議等

①アジア・アーツマネジメント会議 : 2006 年に第 1 回が開催されたもので、2009 年に第 4 回(大阪)、2010 年に第 5 回(バンコク)、2011 年に第 6 回(ジョグジャカルタ)で行った。アーツマネジメントの研究者と実務家による討論で、中産階級を前提とする欧米型ではなく、貧困層に焦点をあてたアジア型アーツマネジメントの構築が急務であるという共通認識に至った。

②アート&アクセス「社会的包摂と舞台表現」 : 2011 年 3 月に大阪にて開催。ボローニャから元ホームレスによる劇団「フラテルナル」を招聘し、大阪市西成区釜ヶ崎地区の元ホームレスとの共同作品を発表。パフォーミングアーツと社会的包摂との間の親和性の高さを実証。

③国際シンポジウム「災害後社会とアートによる地域マネジメント」 : 2011 年の東日本大震災を受けて、コミュニティを再構築するにあたってアートが果たし得る役割を、地域マ

ネジメントという観点から議論した。国内の他、韓国、タイ、インドネシアから専門家が来日し、討論に参加した。

(3) 理論的成果

①アクセシビリティと公共性：アートは公共的空間を広げるときの強力な助けとなる。それは貧困という問題を直接的に解決することにはならないかもしれないが、排除されがちな人々のためのセーフティネットの形成に役立つだろう。公共性の拡大はデモクラティックな社会をつくることに繋がる。

②アジア型アーツマネジメント：コミュニティに根ざした芸能や工芸の手法のなかから、マネジメントの方法を抽出する。特別な才能をもつ個人ではなく、複数あるいは多数の人々が共同で作品（製品）を生み出す手法。社会の構造は基本的に機能分化しておらず多重的である。その特質の上に成立するのがアジア型アーツマネジメントである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計9件)

①諏訪晃一、「リアリティの共同構築」としてのまちづくり：心理学・社会学と災害研究からみた船場アートカフェ、査読無、13巻、2012、28-37。

②山口(中上)悦子、医療現場の共同体における協働を志向する芸術活動—大阪市立大学医学部附属病院の Community - Collaborative Art (Coco-A) の変遷—、URP GCOE DOCUMENT、査読無、13巻、2012、38-53。

③中川眞、被災地の復興におけるアートの役割、大阪市立大学都市防災研究グループ編『いのちを守る都市づくり 課題編』大阪公立大学共同出版会、査読無、2012、225-236。

④諏訪 晃一、「知の地産地消」としての「市民調査」、みみずく (市民活動センター神戸ニューズレター)、査読無、28巻、2011、4-5。

⑤山口 悦子、杉山暁子、丹後幾子、巽花子、押谷由登美、花村周寛、上田假奈代、榊崇、式庄華子、新宅治夫、瀬川裕昭、富山康弘、松井徳造、湯峯克也、石井正光、「芸術家と病院職員の協働によるアート活動—大阪市大病院アートプロジェクト 2008「風のおみく詩(じ)」の報告—」(実践報告)、アートミーツケア、査読無、3巻、2011、81-89。

⑥増田聡、パクリ：ポピュラー音楽の場合、ポピュラーカルチャー研究、査読無、4(1)巻、2010、22-32。

⑦Shin NAKAGAWA、Aesthetic Strategy of Sound Art - How could it be public?、Asian Arts & Aesthetics、査読有、4巻、2010、67-79。

⑧ Shin NAKAGAWA、Koichi SUWA、A Cultural Approach to Recovery Assistance following Urban Disasters, City, Culture and Society、査読有、1巻、2010、27-36。

⑨Shin NAKAGAWA、Socially Inclusive Cultural Policy and Arts-Based Urban Community Regeneration, Cities、査読有、27 Supplement 1、2010、16-24。

[学会発表] (計16件)

① Shin Nakagawa、Art and Access; its multi-perspective co-existence、World Music Freedom Day (Intermusic Center)、2012年3月4日、Chulalongkorn University。

② Shin Nakagawa、Opening lecture for 'Art Education and Crisis Management、the 10th Urban Culture Research Forum in Bangkok、2012年3月1日、Chulalongkorn University。

③ 中川眞、被災地の神楽復興支援と連繋、地域創造機構、2012年2月26日、追手門学院大阪城スクエア。

④ Shin Nakagawa、Keynote lecture for "Locality, Sites and Empowerment、the 10th Urban Research Forum in Yogyakarta、2012年2月20日、Gadjah Mada University。

⑤ 中川眞、災害に果たす文化の役割、大阪市立大学特別講義「東日本大震災から学ぶ都市防災」、2011年11月12日、大阪市立大学。

⑥ 中川眞、災害後の生活文化復興とアーツマネジメント、山口県立大学特別講義、2011年10月27日、山口県立大学。

⑦中川眞、岩手県陸中沿岸における民俗芸能の復興を目指した連繋、第 62 回東洋音楽学会大会、2011 年 10 月 8 日、京都教育大学。

⑧諏訪 晃一、声に出して読む阪神大震災、船場アートカフェ主催、2011 年 2 月 4 日、船場アートカフェ（大阪府大阪市）。

⑨山口（中上）悦子、医療の質向上を目指した、子どもの療養環境改善、第 26 回日本小児がん学会・第 52 回日本小児血液学会総会・第 26 回日本小児がん学会学術集会・第 8 回日本小児がん看護学会・第 15 回財団法人がんの子供を守る会合同公開シンポジウム「子どものワクワクを作る療養環境」、2010 年 12 月 19 日、グランキューブ大阪（大阪府大阪市）。

⑩Shin Nakagawa、A Socially Inclusive Approach to Generating Creative Cities、Thailand International Creative Economy Forum (TICEF), “GloboLOCALisation – Local Move, Global Success”, 2010.11.28–30、Centara Grand Hotel, Bangkok, Thailand.

⑪諏訪 晃一、アクションリサーチとしての市民調査：市民調査のメタアクションリサーチに向けて、日本心理学会第 74 回大会、2010 年 9 月 21 日、大阪大学(大阪府豊中市)。

⑫山口（中上）悦子、医療現場における「改善」を目指した創造的活動のデザイン、第 57 回日本グループ・ダイナミクス学会、2010 年 8 月 29 日、東京国際大学(埼玉県川越市)。

⑬諏訪 晃一、グループ・ダイナミクス研究と固有名詞の関係に関する予備的考察、日本グループ・ダイナミクス学会第 57 回大会、2010 年 8 月 29 日、東京国際大学(埼玉県川越市)。

⑭Shin Nakagawa、Urban Community Regeneration through Cultural Activity、The 2nd International Symposium “Locality and Humanities”、2010.6.17-18、HK Research Center, Korean Studies Institute, PNU, Korea.

⑮ Etsuko NAKAGAMI-YAMAGUCHI、Community-collaborative art in a hospital: Management strategy for sense making and development in the hospital organization/community-hybridized society、Nordic Conference on Activity Theory and the Fourth Finnish Conference on Cultural and Activity Research (FISCAR10)

Symposium 14: Making Visible and Designing the Networks of New Ways of Life and Learning in the Modern Rhizome Society、2010.5.23、Helsinki.

⑯増田聡、パクリ:ポピュラー音楽の場合、京都精華大学ポピュラーカルチャー研究プロジェクト「第 1 回 ポピュラー・カルチャーシンポジウム」・シンポジウム『パクリ:ポピュラー・カルチャーにおける模倣と流用』、2010 年 4 月 24 日、京都精華大学（京都府京都市）。

〔図書〕(計 2 件)

①中川眞、フィルムアート社、これからのアートマネジメント — ソーシャルシェアへの道、2012、192。

②中川眞、大阪市立大学都市研究プラザ、アートと地域：社会実験としての小さな公共圏生成へ、2011、128。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中川 眞 (NAKAGAWA SHIN)

大阪市立大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：4135637

(2) 研究分担者

山口 悦子 (YAMAGUCHI ETSUKO)

大阪市立大学・大学院医学研究科・病院講師
研究者番号：60369684

増田 聡 (MASUDA SATOSHI)

大阪市立大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：50325304

諏訪 晃一 (SUWA KOICHI)

大阪大学・人間科学研究科・助教
研究者番号：50440962

(3) 連携分担者

なし